

犬と猫の皮膚・皮下の腫瘍における FNA の細胞診断の有用性と限界について

○ 吉田恭子、森 崇、山田雅人、坂井田 誠、酒井洋樹、柳井徳磨、柵木利昭、丸尾幸嗣
(岐阜大学)

腫瘍の診断において、様々な生検が行われ、その後の治療計画や予後判定に役立てている。このうち細針吸引生検 (FNA) は、無麻酔で手軽に実施することができ、動物への侵襲が最も少ない簡易な方法である。今回、皮膚・皮下の腫瘍に対する FNA の有効性を調べることを目的として、FNA による細胞診断を手術や剖検による組織診断と比較し、FNA の診断精度を調べた。また、ニードルコア生検または切開生検による診断精度を調べ、FNA と比較検討した。

2004 年 3 月から 2006 年 9 月までに岐阜大学附属動物病院腫瘍科に来院し、FNA、ニードルコア生検または切開生検を実施し、手術または剖検を行った犬 77 頭および猫 7 頭より得られた皮膚・皮下の腫瘍 98 例を対象とした。すべての細胞診断または組織診断は、岐阜大学獣医病理学教室によって実施された。まず、犬 63 頭、猫 4 頭より得られた 78 例において、FNA による細胞診断を手術または剖検による組織診断と比較した。69 例は FNA で腫瘍と診断され、その内訳は、上皮系腫瘍 24 例、間葉系腫瘍 22 例、独立円形腫瘍 9 例、混合腫瘍 14 例であり、組織診断と比較して真の陽性は 68 例、偽陽性は 1 例であった。9 例において FNA で非腫瘍と診断されたが、組織診断と比較して真の陰性は 2 例、偽陰性は 7 例であった。組織診断に対する FNA の細胞診断の一致率は 89.7% であった。腫瘍を FNA で腫瘍と診断する率 (感度) は 90.7%、非腫瘍を FNA で非腫瘍と診断する率 (特異度) は 66.7%、陽性反応的中度は 98.6%、陰性反応的中度は 22.2% であった。次に、犬 16 頭、猫 3 頭より得られた 20 例において、ニードルコア生検による組織診断と手術による組織診断とを比較したところ、感度は 84.2%、特異度は 100%、陽性反応的中度は 100%、陰性反応的中度は 25% であった。また、犬 6 頭より得られた 7 例において、切開生検による組織診断と手術または剖検による組織診断とを比較したところ、感度は 66.7%、特異度は 100%、陽性反応的中度は 100%、陰性反応的中度は 33.3% であった。

これらの結果より、皮膚・皮下の腫瘍において FNA は、非腫瘍と診断する精度は低いもののニードルコア生検や切開生検の診断精度と大差はなく、有用な診断方法であることが示唆された。